比喩の虚構性の諸相
－英語の従属接続詞 as if の修辞的用法－

小松原　哲太

1. はじめに

比喩は虚構性をともなう表現であるが、虚構世界は現実世界とまったく無関係であることはない。基本的には、比喩の虚構世界は、私たちの身体経験を基盤とした起点領域（source domain）の概念を写像して伝達したい目標領域（target domain）を概念化することで形づくられる。この点で、比喩は身体性をもつ（Lakoff and Johnson 1999, Grady 2005, Gibbs 2006, 鍋島 2016）。比喩が身体性をもつことは、認知言語学の理論的な前提になりつつあるが、本論文では、比喩の起点領域がつねに経験を基盤とするわけではないことを論じる。人間の想像力は豊かであり、現実には起こりえない虚構を、想像力によって概念化し、比喩の起点領域にすることができる。この虚構をつくり出す概念操作は、慣用表現の体系から逃れる「修辞意識」（山口 2016［1965］）によるものであり、比喩が知性の産物であることの一端を示している。

そして、このような虚構を比喩の起点領域として表現できる文法的構文が、言語には存在する。英語のX as if Y構文は、そのような比喩の構文の1つである。本論文では、この構文の特徴を概観し（2節）、均衡コーパスから抽出したX as if Y 構文の用例をもとに、比喩の起点領域の虚構性を分析して、これを分類する（3節）。分類結果をもとに、身体性を前提とする比喩研究では注目されていない「虚構的起点領域」をもつ事例の特徴を分析する（4節）。

2. X as if Y構文の特徴

本論文では、2つの節X、Yを接続するX as if Y構文が、現実には起こりえない事柄を起点領域とした、比喩的な意味を伝達することができる構文であることを論じる。as ifは一見すると、asがif節を補部としてとるように見えるが、asとifは複合して1語をなしている統語的、意味的証拠がある（Huddleston and Pullum 2002: 1151-1152）。as if全体としての特徴は、部分をなすasとifの特徴をどちらも完全には引き継いでおらず、構成的に予想することができない。この意味で、as ifは「構文（construction）」（Goldberg 1995）である。構文は形式と意味の対である。以下ではまず、X as if Y構文の形式と意味の基本的な特徴を概観する。

2. 1. 形式

従属節（subordinate clause）を導く接続詞（conjunction）を従属接続詞（subordinating conjunction あるいは subordinator）と言う。従属節接続詞は、単純（*e.g.*, as, if, like）、複合（*e.g.*, in that, as if, as long as）、相関（*e.g.*, if...then, as...as）の3つに構造的に区分できる。as if は定形節（1a）、to不定詞節（1b）、-ed分詞節（1c）、-ing節（1d）を導く複合的な従属接続詞である（Quirk et al. 1985: 998-1007）が、as if が導く節は定形節であることが多い（Biber et al. 1999: 826）。（2a）のようにasとちがい名詞を補部としてとらず、（2b）のようにifとちがいto不定詞を補部としてとる（Huddleston and Pullum 2002: 1151-1153）。

（1）a. He speaks **as if** he were a king.
　　b. He opened his mouth **as if** to speak.
　　c. Everything was **as if** grown together with the earth.
　　d. He bends down **as if** helping the child.　　（安藤 2005: 613）

（2）a. He speaks {as/*as if} a king.
　　b. He opened his mouth {*if/as if} to speak.

as ifが導く従属節Yは、（3a）のような副詞節（adverbial clause）の場合と、（3b）のような補部節（complement clause）の場合に分けられる。補部節の場合、Xに生起する動詞は look, appear, feel, sound, taste, be などである（Huddleston and Pullum 2002: 1152）。このような補部節をとる動詞の用法は、（4）に示されるように、that節の場合は非人称構文に限られるが、as if節の場合は限られない。

（3）a. She acts **as if** she hates me.
　　b. It seems **as if** we've offended them.（Huddleston and Pullum 2002: 1151）

（4）Ed seemed {as if/*that} he was trying to hide his true identity.（*ibid.*, 962）

2. 2. 意味

仮定（hypothesis）の意味を表す英語の主な構文はifを用いた条件節構文である。条件を表すif節の過去時制（すなわち仮定法）と主節のwouldによって仮定の意味が表現される。条件節構文以外に、仮定の意味を表すいくつかの特別な構文があり、その1つがas if構文である（Leech and Svartvik 2002: 146）。

（5）a. She acts **as if** she hates me.（=3a）
　　b. She acts **as if** she hated me.

Yが定形節である場合、Yは（5a）のように仮定法過去である場合もあれば、（5b）のように指示する事柄が現在時制で直説法現在が用いられる場合もある。Yの動詞の法は、Yの内容が事実である可能性の高低を示唆する（Quirk et al. 1985: 1100）。（5a）では、彼女が私を実際に憎んでいるか、そうである可能性が十分ある。これに対して（5b）では、彼女が私を憎んでいることが事実に反するとされているわけではないが、その可能性はわずかである（Huddleston and Pullum 2002: 1152）。

Yが非定形節（to節、-ed節、-ing節）である場合は、時制にもとづいてYの表す事態の事実性を判断することはできない。

統語構造ごとにみると、第1にYが副詞節の場合、その主な機能は比較（comparison）を示すことにある（Huddleston and Pullum 2002: 1151）。Yの動詞が活動動詞である場合は、様態（manner）の類似性（similarity）を表す（Quirk et al. 1985: 1110）。（6a）は、彼（he）と酔っ払い（a drunk）の行動を比較して、その様態が類似していることを表す。つまり、'He uses statistics in the way *x*' で 'a drunk uses a lamppost in the way *y*' の時、*x* = *y* であることを表す。この意味は（6b）のように関係節でも表現できる（Huddleston and Pullum 2002: 1149）。

（6）a. He uses statistics **as if** a drunk used a lamppost, for support rather than illumination.

b. He uses statistics in the way a drunk uses a lamppost.

（7）She treats me **as if** I were one of the family.（Leech and Svartvik 2002: 105）

Yが表す状況を想定すれば納得できる（reasonable）ような様態とXの様態のあいだの類似性（Huddleston and Pullum 2002: 1151）を表す場合もある。（7）は 'she treats me in the way *x*' の *x* と 'I am one of the family' という状況から想像される待遇 *y* について、*x* = *y* であることを表す。

第2にYが補部節の場合、as if節は比較というよりは、内容節が真（true）であるかどうかという問題に関係する（Huddleston and Pullum 2002: 1151）。（8a）のように、定形節を補部にとるseemの非人称構文においては、大きく意味を変えることなく、従属接続詞のas ifとthatを入れ替えることができる。（8b）では、lookedとwasを入れ替えることができる。これらの構文では、as ifはlookやseemの意味と整合性があり、認識的モダリティ（epistemic modality）の意味を補強する（Huddleston and Pullum 2002: 1151-1152）。

（8）a. It seemed {as if/that} he was trying to hide his true identity.

b. It {looked/was} as if he was trying to hide his true identity.

（Huddleston and Pullum 2002: 962）

3. 分析方法と結果

以上でみたように、X as if Y構文の一般的な特徴は、複合従属接続詞as ifが導く従属節Yが仮定的な意味を表す点にある。Yが副詞節の場合は様態の類似性を表し、Yが補部節の場合はモダリティ的な意味を表す。

X as if Y構文のもつ仮定的意味は、（1a）のように、比喩的意味を表すことがあることはよく知られており、節レベルの直喩（clausal simile）（Goatly 2011: 184-185）の事例として記述されてきた。認知言語学の定義によれば、概念レベルの比喩（conceptual metaphor）は、起点領域から目標領域への写像（Lakoff 1993）として規定される。直喩は、概念レベルでの起点領域と目標領域の写像を喚起する表現であると言える。起点

領域は典型的には、より具体的で身体性を備えた、明瞭に規定される概念（*e.g.*, 建物、移動）であるのに対して、目標領域はかなり抽象的で漠然とした概念（*e.g.*, 時間、社会）である傾向がある（Kövecses 2010: 17）。X as if Y構文の事例には、起点領域が身体性を備えた概念である事例だけでなく、現実性を欠いた虚構的な概念である事例も存在するが、このタイプの事例は注目されてこなかった。しかし、本論文がとりあげる虚構的起点領域の比喩は、人間の知性と想像力の反映であり、比喩ならではの表現効果をもつという点で、創造的言語使用の特性を解明するための研究材料になる。

本論文では、X as if Y構文の用例を、Yが表す事態の虚構性の観点から分類し（3節）、得られた虚構的起点領域の事例の特徴を詳しく観察する（4節）。

3. 1. 分析方法

BNC（British National Corpus）から無作為に抽出した ‘as if’ の用例500例を分析対象として、従属節Yが表す事態の意味的特性によって、各例を印象用法、虚構用法1（経験的起点領域）、虚構用法2（虚構的起点領域）の3つの用法のいずれかに分類し、各用法の事例の特徴を分析した。以下では、この3つの用法の分類基準を述べる。

3. 1. 1. 印象用法

as ifは仮定的な意味をもつため、基本的に「非現実（irreality）」（Langacker 2008: 302）の意味を表す。非現実とは、話者によって現実（reality）としては受け入れられていない事柄をいう。2.2節でみたように、従属節Yの表す事態が、発話時点では現実であるかは分からないが、情報の追加などにより、現実であると分かる可能性がある用法がある。本論文ではこれを印象用法（impression use）とよぶ。

（9）He closed his eyes, **as if** he were tired, and Jessamy found that her gaze kept straying to him（...）（BNC）

例えば（9）は、X = ［he closed his eyes］、Y = ［he were tired］である。従属接続詞as ifとYの仮定法過去の使用は、話者は彼が疲労しているかどうかに確信が無く、非現実であることを示している。しかしこのコンテクストでは、Yが表す事態が現実に整合性があり、Xがその知覚的な指標であることを意味している可能性は十分にある。

3. 1. 2. 虚構用法1：経験的起点領域

印象用法では、従属節Yが表す事柄が発話場面において現実的である可能性が十分にある。これに対して、Yが現実となる可能性がほとんどない非現実を表す用法を、虚構用法（fiction use）とよぶ。（10）では、X = ［Jeane Russell crushed the man’s hand］、Y = ［it（=the man’s hand）were an eggshell］であるが、（特殊な設定がないかぎり）手は卵の殻ではないため、Yが現実を表す可能性は無い。

（10） Jeane Russell smiled, and crushed the man’s hand **as if** it were an eggshell.（BNC）

虚構用法は、たいてい比喩として解釈される。(10) は手を卵の殻に喩え、Russellの握力に対するもろさを強調している。このような比喩の虚構性は、2つの関連性の薄い概念領域（すなわち、起点領域と目標領域）の要素（*e.g.*, 手・卵の殻）が概念融合（conceptual blending）（Fauconnier and Turner 2002:）することの虚構性である。この副詞節を導くas ifの用法は、手と卵の殻を比較し、それらを握りつぶす際の様態の類似性にもとづいて、手を卵の殻“として”概念化するプロセスを喚起する。

（10）の卵の殻を握りつぶす様態という起点領域の概念は、身体経験を通じて構築され得る点で、(10) のような比喩は、**経験的起点領域**（experiential source domain）が基盤になっていると言える。本論文では、これを虚構用法1とする。

3. 1. 3. 虚構用法2：虚構的起点領域

虚構用法のなかには、経験し得ない概念から構成される**虚構的起点領域**（fictive source domain）を基盤にするものがある。本論文では、これを虚構用法2とする。

（11）（...）the recoiling backwash of the seas was heaped with fluffy spume **as if** some giant hand had emptied a mammoth packet of detergent there.（BNC）

（11）では、X = ［the recoiling backwash of the seas was heaped with fluffy spume］、Y = ［some giant hand had emptied a mammoth packet of detergent there］であり、起点領域となるのは、巨大な手が大量の洗剤を海岸に撒く様態である。このような状況は、海の波を埋め尽くすほどの洗剤の量、それらを一息に撒くほどの手の大きさからすると、現実世界では経験し得ない、想像力（imagination）によって構成された概念であると言える。

副詞節を導く用法では、様態の類似性のみが問題になるため、目標領域の概念とは類推関係にない概念を指示対象とする語句（*e.g.*, some giant hand, a mammoth packet of detergent）を、副詞節の主語、目的語、述語として用いることが許容される。このX as if Y構文の特性は、(11) のas if節の虚構性の適切さを支えている。

3. 2. 結果

分類の結果を表1に示す。印象用法と虚構用法、どちらかの用法への顕著な偏りはみられなかった。虚構用法については、経験的起点領域の事例が多数を占めた。虚構的起点領域の事例52例には、様々な虚構性のタイプが観察された。

表1：X as if Y構文の用法

分類1	分類2	用例数	割合
印象用法		251	50.2%
虚構用法		249	49.8%
	虚構用法1	（197）	（39.8%）
	虚構用法2	（52）	（10.4%）
	［合計］	500	100%

4. 虚構的起点領域をつくり出す認知プロセス

X as if Y 構文の比喩では、虚構的な起点領域が用いられることがある。このことは、身体経験にもとづく概念だけではなく、想像的な認知プロセスを経て虚構的に構築される概念を比喩の起点領域として理解することが、コミュニケーションの成立の上で不可欠である場合があることを示している。以下では、空想、隠喩、誇張の観点から、本調査で得られた虚構用法2の事例で虚構性が生じる要因を分析する。

4. 1. 空想

空想のなかでは、自由な発想で概念を形成、拡張、変更することができる。本論文の調査では、空想にもとづく虚構的起点領域の事例に、従属節が表す事態が概念の創造、消滅、拡大縮小、役割交替によって虚構性を帯びているものが観察された。

4. 1. 1. 創造

創造は主に名詞句の指示対象の虚構性に関わる。(12) では幽霊 (ghosts) は現実には存在しないと考えられているので、幽霊がつけてくるという事態も虚構的である。

(12) (...) I could feel other presences, **as if** ghosts hiding in the shadows watched her pass then trailed behind us(...)

(13) **As if** he had X-ray eyes he could visualise the metal cylinder concealed within the bag(...)

虚構的存在は、新たに創案されることもあるが、「ユニコーン」「ペガサス」のように、現実的存在の概念融合によって空想される場合も多い(山梨 2012: 38-40)。(13)では、人間の目とX線検査機が融合した空想の存在 (X-ray eyes) が起点領域の主だった要素になっている。

創造は、空想の虚構起点領域の事例のなかでも最もよくみられるタイプである。ここでは空想的存在が鍵になっており、事態の虚構性は、事態がその存在を含むことから二次的に生じている。

4. 1. 2. 消滅

創造が、無いものを有るかのように概念化することであるのに対して、消滅は、有るものを無いかのように概念化するプロセスである。(14) は、手が隠れていることを、手が無いことと比較して、その視覚的様態を表現している。(15) は、自分たち以外の存在が幻影で実在しない世界との比較で、孤立感や隔絶感を表している。

(14) 'The length of these sleeves! It looks **as if** I've got no hands.'

(15) (...) in the whole of this alien and bewildering world, only the two of them had any real substance; **as if** all else was an illusion.

4. 1. 3. 拡大縮小

Jonathan Swiftの*Gulliver's Travels*のように、既知の存在を拡大したり縮小したりすると、空想の世界をつくり出すことができる。(11) は拡大の例であり、手や洗剤を大きくすることから虚構性が生じている。(16) では霧がブランケットに喩えられており、ここでもブランケットが辺り一面を包みこむような巨大さで描かれている。

(16) 'Damn fog; it's rolling in **as if** it means to isolate us beneath a blanket.'

4. 1. 4. 役割交替

社会的役割を変更することで、現実世界とは微妙に異なる空想世界ができる。(17) は、父と息子の関係を入れ替えて概念化することで、子の頼もしさ、父の頼りなさ、愛らしさを表現している。

(17) He is up and about before his father and he gets his father up, **as if** he were the parent and his father the sleepy child.

4. 2. 隠喩

隠喩は、ある存在を、それと似た別の存在として概念化するプロセスである。ある様態や認識は、字義通りの表現では表しにくいことがある。本調査では、比喩の起点領域となる従属節Yが表す事態そのものが、擬人化や擬物化を介して隠喩的に概念化されている例がみられた。

4. 2. 1. 擬人化

擬人化 (personification) は、動物や非生物が人間の属性を持っているかのように表現する (Lanham 199: 123) 隠喩の一種である。擬人化が起点領域に虚構性を与える事例には、(18) (19)のような、lookやseemが補部節を導く用法が多い。これらの例では、補部節が隠喩的であることを、X as if Y構文が言語的に明示化している。これは日本語の「Xのようだった」のように、認識的モダリティの意味が比喩的に転用されたものと解釈できる。

(18) To Sam suddenly it seemed **as if** all the stones were listening and the tall rocks leaning over them.

(19) So it looks **as if** (...)nature has kind of (...)struck a bargain in this respect (...)

4. 2. 2. 擬物化

擬物化 (擬物法) は、人間をものに見立てる隠喩の一種である (野内 2005: 95)。(20) では、人間の肉体が窓として概念化されている。(21) は人間を喩えていないが、言葉という形のない存在が、大きさと硬さをもった存在として概念化されているという点で擬物化に似た用例である。

(20) His/her foul body shone phosphorescently as if lit from within; **as if** his/her

flesh acted as a window to a lascivious light from elsewhere.

（21） ‘Once I was mortal, like you,’ said Fand - slowly, **as if** the words came hard.

4. 3. 誇張

誇張（hyperbole）は、字義通りに理解されることを意図せずに、強調のために過剰な言葉を用いることをいう（Lanham 1991: 86）。誇張は、ある存在の属性を、別の存在がもつそれよりもはるかに顕著な属性によって概念化する。どのような経験領域の属性が問題になるかという観点から分類すると、本調査で観察された虚構的起点領域の事例は、身体経験、時間認知、社会認知の誇張に分けられる。

4. 3. 1. 身体経験

身体経験の顕著な属性を強調する際に、実際に経験すれば死に至るか重傷を負うため、ほとんど経験不可能であるような身体経験が比較対象に挙げられることがある。（22）は、心臓が張り裂けると死んでしまうので、従属節Yは虚構的な事態を表すと言える。（23）は、驚いて声がうまく出ない感覚を強調するために、声帯が凍るという虚構的な身体経験が引き合いに出されている。

（22） Because she'd abruptly felt **as if** her heart would burst if she didn't let him touch her, kiss her, hold her in his arms again（...）

（23） So surprised by the movement he felt **as if** his vocal cords had frozen, Paxton hardly moved as his head was yanked hard backwards.

4. 3. 2. 時間認知

時間認知の誇張の事例として、有限の時間を永遠として概念化するタイプがある。（24）では、罰を受ける時間の長さを、（25）は古い流行の持続の長さを、永遠として誇張的に表現している。

（24） When the coin flipped over, it seemed **as if** the punishment would be never-ending.

（25） His flared brown wide-lapelled suit was outrageous, **as if** the seventies had never been away.

4. 3. 3. 社会認知

社会認知の領域における属性を強調するタイプとして、コミュニティの範囲の大小を誇張する事例（例えば「皆持ってる」「誰でも知ってる」）が挙げられる。（26）は、女性が珍しいことをただ1人と誇張して述べている。（27）では、「彼」が親しんできたコミュニティの範囲を誇張して、50歳以上の人だけに狭めて表現している。

（26） Where the waiters pounce on you（...）**as if** you are the only girl in the world.

（27） What irritates me most about him is his way of speaking. Cliché after cliché

after cliché, and all so old-fashioned, **as if** he's spent all his life with people over fifty.

5. おわりに

概念レベルでは、比喩は起点領域と目標領域の写像として定義される。比喩の起点領域は、経験を基盤とする経験的起点領域と、想像力によって経験を改変した虚構を基盤とする虚構的起点領域に分けられる。本論文では、X as if Y 構文の用例のなかに、比較的少数ではあるが、虚構的起点領域の事例が存在することを示した。起点領域が虚構化する要因は多様であるが、本論文の調査から、少なくとも空想、隠喩、誇張が虚構的起点領域を形成する認知プロセスとなり得ることが分かった。この結果が示唆するのは、虚構世界は想像力によって自由自在に描き出すことができるように思えるが、それを可能にするのは、現実世界における経験の蓄積と比較的少数の人間の認知能力であるのかもしれない、ということである。

本論文の調査結果が加えて示唆するのは、X as if Y 構文の意味が虚構的起点領域の比喩の適切性を支えているということである。この構文は、あくまで従属節Yが表す事態の様態やその事態の認識を伝える表現であるため、その事態の中心要素を表す主語や目的語の意味が目標領域と関連していなくてもよい。この条件により、従属節Yにはかなり自由な表現の選択肢が開かれる。虚構的起点領域の事例は、この自由度を活かしている。文法的構文は、さまざまな文法的意味をもっており、この文法的意味が、多彩な比喩表現の伝達と理解を可能にする。本論文では、英語の構文の1つを取りあげたが、各言語の多様な比喩構文について、さらなる記述の蓄積がまたれる。

謝辞

シンポジウムの企画から発表に至る約1年間にわたって、登壇者の野田大志氏、鷲見幸美氏、西山秀人氏と多くの議論を交わす機会に恵まれた。シンポジウムでは菊地礼氏、黒田一平氏、住田哲郎氏、西田隆政氏、半沢幹一氏、松浦光氏、三田寛真氏、柳澤浩哉氏、山田昌裕氏（五十音順）から有意義な数々のコメントを頂戴した。記して感謝申し上げたい。

参考文献

Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English.* London: Longman.

Fauconnier, Gilles, and Mark Turner. 2002. *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities.* New York: Basic Books.

Gibbs, Raymond W. 2006. Metaphor Interpretation as Embodied Simulation. *Mind & Language* 21(3) : 434-458.

Goatly, Andrew. 2011. *The Language of Metaphors.* 2nd edition. New York: Routledge.

Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure.* Chicago: The University of Chicago Press.

Grady, Joseph. 2005. Primary metaphors as inputs to conceptual integration. *Journal of Pragmatics* 37（10）: 1595-1614.

Huddleston, Rodney D., and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Kövecses, Zoltán. 2010. Metaphor: *A Practical Introduction.* 2nd edition. Oxford: Oxford University Press.

Lakoff, George. 1993. The Contemporary Theory of Metaphor. In Ortony, Andrew ed. *Metaphor and Thought*, 2nd edition, pp. 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, George, and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought.* New York: Basic Books.

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction.* New York: Oxford University Press.

Lanham, Richard A. 1991. *A Handlist of Rhetorical Terms.* 2nd edition. Berkeley: University of California Press.

Leech, Geoffrey N., and Jan Lars Svartvik. 2002. *A Communicative Grammar of English.* 3rd edition. London: Longman.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

安藤貞雄. 2005.『現代英文法講義』東京: 開拓社.

鍋島弘治朗. 2016.『メタファーと身体性』東京: ひつじ書房.

山口正. 2013［1965］.「表現における修辞意識」表現学会（編）『言語表現学の基礎と応用』: 193-196. 大阪: 清文堂.

山梨正明. 2012.『認知意味論研究』東京: 研究社.

野内良三. 2005.『日本語修辞辞典』東京: 国書刊行会.

（神戸大学）